

# HOTEL SCRIBE PARIS



中山 秀一

## ぶっつけ本番！ アポなし取材

### ～世界初の映画興行・ルミエール館を訪ねる～

1895年12月28日に、自身が開発した、シネマトグラフと称する撮影・映写システムで、世界初の有料による映画興行を行ったのが、フランスのルミエール兄弟である。このことは、映画映像を志す者はもちろん、一般にも知られている。

その公開上映が行われた場所は、パリ・オペラ座の近くにある、五つ星高級ホテルの「グラン・カフェ」である。そのホテル名は「HOTEL SCRIBE PARIS」で、建物は1860年に、貴族の乗馬社交クラブの本部として建てられた。「グランカフェ」はそのクラブの1階と地階にあり、ルミエール

の映画上映は、地階にあるサロン「インドの間」で行われた。

#### ホテル・スクリーブを訪ねる

映画テレビ技術協会発行の「プロのためのビデオ取材」は、1992年に初版を刊行して以来28年、現在も販売されている。

この拙著の中で映画の起源を説明している項があるのだが、映画の創始者ルミエールの話を更に補足したいと、かねてから思っていた。

2015年7月、フランスに旅行する機会

があり、ルミエールが世界初の有料映画上映会を行ったとされる、「ホテル・スクリーブ・パリ」を訪れて、いつでも追加の原稿が書けるようにと、取材をしておくことにした。

本来なら、出身のテレビ局に依頼して、パリ支局からアポを取ってもらい、支局スタッフ立ち合いで取材を行うのが筋かも知れない。すると多くの人たちのお手を煩わせることになる。それほどの内容ではないので、パリのホテル・スクリーブを直接訪ねて、ぶっつけアポなし取材を試みることにした。

「当たって砕ける！」の精神ではあるが、最小限の準備をした。

準備とは、映画テレビ技術協会から頂いている取材用の名刺、基本的に国内用なので日本語表記である。幸い、協会名MOTION PICTURE AND～、記者という肩書のReporterと氏名は英語併記になっている。その他資料として、筆者の記事が掲載されている映画テレビ技術協会誌を2冊と、Googleからコピーしたホテルの外観写真などを用意した。



玄関脇にある銘板を指し示す担当のルイ氏、ルミエールによるシネマトグラフ上映の史実を示している。



観光客で賑わうオペラ広場



「ホテル・スクリーブ」はオペラ広場から徒歩10分。この地域開発当初からの歴史的な建物だということだ

## いよいよホテル・スクリーブへ

ホテルは、パリ・オペラ座からカプシーヌ大通りを西へワンプロック行くと、スクリーブ通りと交わる角にあり、オペラ座からはごく近い位置である。

具体的には、オペラ広場からカプシーヌ大通りを西に10分ほど歩くと、右から延びるスクリーブ通りと交わるT字路に着く。そのT字路右手に面した大きな建物が「ホテル・スクリーブ」だ。スクリーブ通りに面した6階建ての長くて巨大な建物は、パリの街並みに合わせた共通の高さで、一種の様式美を感じさせる。そしてその外壁の色は明るいクリーム色で、これもパリの街並みと共通の色彩で美しい。

さて数ある入口の中から、最も大きなアーチ形のホテル用入り口を入ると、右側の外来デスクに受付の女性が座っている。

とりあえず、この受付嬢に用件を片言の英語で伝えると、すぐそのソファに掛けて待つようにとのこと。出入りする色々な人たちを横目に見ながら、待つこと15分、一向に音沙汰がないので、再度受付嬢に聞くと、どこかに電話して、ロビーの奥の方にある案内デスクに行ってくれという。

ロビーの案内デスクは、用件を知っていたようで、あそこで待つように、と別の場所を指定された。今度の指定席は、打ち合わせ用の低いテーブルを挟んで、しゃれた長椅子が向かい合っている。

座って待つこと何と30分、どうなっているのだろうと、再び案内デスクに問い合わせると、ようやく現れた。アラブ系を思



外来受付デスク。ロビーの奥に案内デスクが見える。左に見えるのは、ルミエールレストランへの抜け道？



外来用のソファで待つこと15分。左端にあるのは乗馬クラブの伝統を忍ばせる置物。

わせるようなハンサム男で、スーツをきちんと着こなしている。

交換した名刺には、氏名が LOUIS SIROT、肩書には GUEST RELATION MANAGER と英語の併記がある。今回の取材用件をへたな英語で話すと、ルイ氏の話す英語は私とどっこい程度で、安堵と不安が入り混じる。

まあ、それほど込み入った取材をするわけではない、要はルミエール兄弟が実際に映画の上映を行った部屋を見せてもらい、写真を撮らせてもらうのが目的である。

持参した資料を一通り見てもらい、取材の目的などを説明して、飛び込みではあるが、少しでも信用と好感を持ってもらうように気を遣う。

目的の「ルミエール映画館」に案内してもらうことにした。

現在では貸し会議室となっており、地下に降りると、小さな食堂の脇に、目指すルミエール館の入り口がある。

さっそく椅子を持ち出し、ルイ・シロー氏に座ってもらい、スクリーンの方を指さして、「あのスクリーンに、ルミエール兄弟



机の上に持参した資料（映テレ協会誌等々）を並べて待つ



入口の横には、当時の上映作品のスチル写真と説明が



ルミエール兄弟が初めて有料の映画を上映した部屋がこれ。現在は会議室として使われている。



部屋はそれほど広くない、せいぜい60席程度が



ルミエール兄弟の前で1人約1万円也のランチを味わう



デザートはあくまでも重々しく提供される



レストランは天空からの採光で、落ち着いた雰囲気

が、世界初の有料映画の上映をしたのです」という感じでポーズしてもらおう。

「もう少し体をひねって、こんな感じでスクリーンの方向を指を差してもらえますか？」と私がちょっと肩と腕に手を添えた。なんと、彼氏は緊張のあまりか、身体がカチカチに固まっている。腕だけを動かそうとしたら、身体も一緒に動いてしまうほど。

この得体の知れない初老の日本人が、若いフランス人に勝手なポーズを注文するので、怒っているのだろうか。気の毒というか、悪いことをしてしまった。

もう少し和やかな雰囲気を作り出してから、お願いをすればよかったのだが、冗談で気分をほぐすほどの語学力もなく、単刀直入に過ぎたと反省をしている。

最後にルイ氏にご足労を願って、ホテル玄関脇の上部にある銘板を、玄関前に立って指さして頂くことにした。その銘板には、1895年12月28日に、ルミエール兄弟が、世界最初のシネマトグラフの公開上映会をここで行った旨が刻んである。

ルイ氏は、ややなれてきたのか、自発的に、伸び伸びと腕を差上げる名演技であった。

## ホテルのレストランでランチをとる

無事取材が終わったところで、ルイ氏から、ホテルのレストランでランチを食べたらどうかと、薦められた。二つ返事でOKし、取材のお礼を言ってルイ氏と別れた。

そのレストランは、ホテルの玄関横からも入れる構造で、待っている間に、覗いて見ているのでよく解っている。

ここは「ルミエールレストラン」ともいうべき雰囲気、壁の写真や調度品、すべてがルミエールに因むものだ。

案内された私たちの席は、主賓クラスが座る席か、日本流には床の間を背にした上席で、ルミエール兄弟の大きな写真が飾ってある暖炉の前である。

食事が終わるころに、ルイ氏が現れて、ホテル・スクリーブの歴史を表した立派な本を届けて下さった。

その内容は、115頁6章からなっており、第1章が創立当時の紹介で始まり、最終章が「Today's elegance」と題して現在のホテルを紹介している。

ルミエール兄弟のシネマトグラフは第2章に14頁を使って紹介している。

以下に、この歴史書から写真を抜粋して転載する。

### (あとがき)

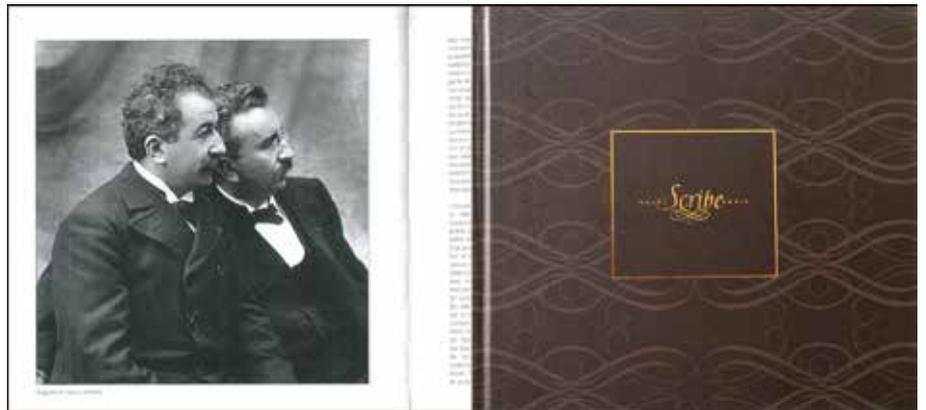
レストランでの食事中に妻が言うには、私たちがロビーで30分も待たされている間に、実はルイ氏が現れていたという。彼は我々のようすを、それとなく観察して戻って行ったそうだ。

私は気が付かなかったのだが、やはり先方も、アポなしで来た我々のことを不審に思って、すぐには信用しなかったようだ。

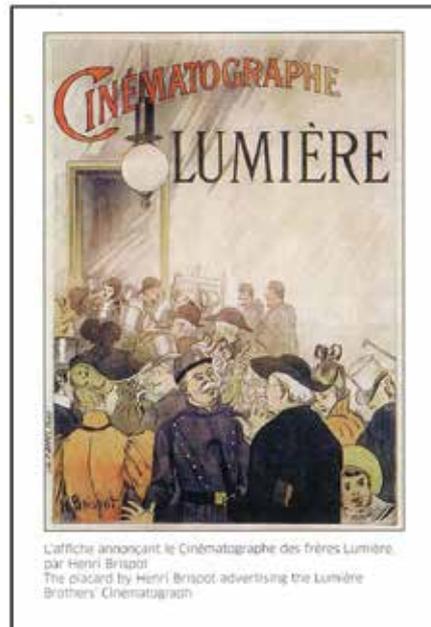
考えれば当然のことで、誰からの紹介もない、旅行者風の私たちを、最終的には親



PARIS. — Le Boulevard des Capucines (L'Hotel Scribe)  
開業当時のホテル・スクリーブ、カブシーヌ大通りに面した威容、乗り合い馬車と自動車と混在している



最初の見開きには、お馴染みルミエール兄弟の肖像



L'affiche annonçant le Cinématographe des frères Lumière, par Henri Brisoot. The placard by Henri Brisoot advertising the Lumière Brothers' Cinematograph.



左は有料上映会のポスター、右は上映会のプログラム。上映作品は10本、トップに有名な「リヨン・ルミエール工場の出口」、6番「水を撒かれた散水夫」が見える。何れも実写がベースの短編記録映像だが、6番のような、散水夫が子供に悪戯される喜劇風の作品もある。

切に案内して下さい。ことに今でも感謝している。

帰途に、このホテルの周りを一巡してみたのだが、その敷地の広さには只々驚嘆するばかりだ。高層ビルにすれば、余剰の敷地を緑地化するなど、空間の余裕が出来る

かもしれない。しかし、それを取ってやらないのがパリで、様式美を感じさせる美しい街並みがルミエールの時代から、将来も続いてほしいものだ。

Syuichi Nakayama  
日本映画テレビ技術協会名誉会員